



会計を木の幹に、 実りある大きな枝葉を広げて 好奇心と探求心を原動力に 自分の可能性を広げてきた



有現会社アキュレイ 代表 / 東急不動産ホールディングス株式会社 社外取締役 / 大日本住友製薬株式会社 社外取締役
新井 佐恵子 Saeko ARAI

昭和女子大学グローバルビジネス学部・教授。公認会計士。日本企業女性初CFO。会計監査及び税務業務に従事した後、IT系のベンチャー企業を共同創業者と起業し、CFO管理本部長として経理、総務、人事システムを一から構築、事業計画、資本政策、資金調達等に携わり、設立3年後に東証マザーズ第1号上場を達成。ホテルウェディング業、環境エネルギー業等のCFO及び取締役、顧問等を歴任。米国デューク大学経営学修士(MBA)。現在、有現会社アキュレイ代表、東急ホールディングス株式会社、大日本住友製薬株式会社社外取締役等、多方面で活躍中。

監査法人での勤務を経て、ベンチャーへの参画や大学の講師、社外取締役など多様なキャリアを重ねられている新井佐恵子さん。日本企業ではまだ人数が少ない“女性CFO”として脚光を浴びるなど、多方面に輝き続けてきた新井さんの歩みと“これから”について話を伺った。

公認会計士を目指した きっかけ

—まずは、公認会計士を目指したきっかけからお聞かせいただけますか。

高校の時に父から勧められ、そこで初めて公認会計士という資格を意識しました。父は当時としては珍しく「女性でも仕事を持ったほうが良い」という考えを持っていて、その影響は大きかったですね。高校生でしたから、公認会計士がどういう仕事なのか明確ではありませんでしたが、将来的に受験してみようと考えていました。

実際には就職活動の時期になって本格的に公認会計士の勉強を始めることになったのですが、当時、業界はいわゆる“売り手市場”にあったので、公認会計士試験に合格する前から研修生として外資系の監査法人に内定をもらうことができました。ところが、その年の会計士試験には合

格でせず、本格的に監査業務を開始することになったのは、翌年に合格してからとなりました。

—どうして外資系の監査法人を選んだのでしょうか？

先輩に誘われ、アルバイトとして入ったのがきっかけでした。「面白そう」と漠然と思って行ってみたら、監査法人の雰囲気が感覚的にしっくりきました。あとは「いずれは海外に行ってみよう」という思いもあって、外資系であればそういったチャンスがあるのかなという期待もありました。

ところが実際に入所して仕事を始めてみると、周囲には英語ができて優秀な人ばかりいて、ドメスティックな仕事に追いやられてしまったと感じていました。最終的には国内のIPO部門に配属となったのですが、そこで「企業の上場を支援したい」という思いが芽生えるようになりました。

—そもそも、どうして海外に行きたいと？

中高生の頃は英語が得意だったんですよ。ところが大学に入ってからあまり英語に触れなくなって、さらに外資系監査法人に入ってから、熱心に取り組むことはありませんでした。実は、少し後の話ではありますが、アメリカのMBAへ進学することになって、友人に話をしたらみんなが口々に「夢が叶っておめでとう」というのです。

私自身はすっかり忘れていたのですが、高校生の時から「海外に行きたい、MBAを取得したい」という話をしていたみたいです。漠然とした憧れはあったのでしょうか。

—監査の業務に従事されてみていかがでしたか。

監査の仕事は自分に合わないと感じていました。ルーティンワークが得意ではないのもあります。監査はルーティンをこなしていかなければならない仕事ですからね。もちろん、監査業務の経験は確実に、その後の私の重要なスキルになっていくのですが、当時はどうしても苦手意識を拭うことはできませんでした。

それで、私は入社1年目にもかかわらず、当時の上司に監査の仕事をつまらないと伝えました。上司は「どうして面白くないの？」と聞くのです。それで理由を述べたら「だったら、面白くしてみれば？」と言われ、衝撃的だったのを今でも覚えています。

それをきっかけに「どうやったら面白いか自分で考えればいいんだ」と悟り、監査を面白く感じるようになりました。「これは何のためにやっているのか？」と考えられるようになり、その後の仕事の質に大きく影響したと思います。

それから5年ほど監査法人で過ごしているうちに、次のキャリアを考えるようになり

ました。そこで浮かんだ選択肢は3つ。1つ目が企業内でCFOとして活躍すること、2つ目が独立して企業の会計顧問、3つ目は中小企業向けの経営支援でした。

いずれかの道に進むにせよ、まだまだ知識も経験も足りないと感じていたので、小規模な会計事務所で税務業務を経験することにしました。税務業務は、個人的な感覚ですが3年ほど経つとひととおり経験できることもあり、ひととおり経験したあとに、また次に何をしよう?と考えることになります。

会計も税務も、企業の外から見る経験は積んだので、次は「企業の中から見てみたい」という思いが芽生えてきました。当時はまだ、日本には終身雇用のマインドが蔓延していて、中途で入社するのであれば外資企業に入るのが良いだろうと思い、MBA取得のための留学を目的に、学校に通いました。

その時期に「インターネットの会社を立ち上げるので来ないか」と誘われました。当時はまだ社員が7人しかいないようなスタートしたばかりのベンチャー企業。ちょうどインターネットの黎明期にあったため、仕事はすごく先進的で面白く、当時のCEOが「MBAに行きたいなら3年後、ウチが上場したら行かせてあげるよ」と約束してく

れ、共同創業者として参画を決めました。その会社で女性CFOとしてマザーズ1号上場を達成。MBAは実際には無理だろうと思っていたら本当に3年後に上場して、アメリカに行かせてもらうことになりました。

子会社の立ち上げに伴って、ニューヨークにオフィスを構えることになり、その立ち上げ当初から参画し、CFOやCEOを務めました。

“超”がつくほど好奇心旺盛

—MBAではどのような知識を獲得しましたか?

普通のMBAというよりは、役員一歩手前の方が学ぶ“エグゼクティブMBA”に入りましたが、日本と違って文系理系の垣根がないのが特徴で、会計や金融関係者だけでなく、歯医者など、多様な人とディスカッションができたことは財産になっています。

また、経営判断のための検討事項を全部数値として指標化し、意思決定を行う授業が展開され、アメリカ式ビジネスの根源的な考えに触れることができたのも興味深

かったですね。もともと個人主義が強い国だからこそ、チームで取組む課題も多く、日本人と世界各地から集まった人たちとの考え方の違いを目の当たりしながら学ぶことができました。

そもそも私がMBAで学びたかったのは「どういうロジックで交渉するとうまく行くのか」「他国の人はどういう風に考えているのか」だったので、そういう意味では非常にマッチしたと感じています。

MBA修了後、アメリカに残ってバイオベンチャーのエクイティファンドの設立準備を進めていましたが、ちょうどリーマンショックが起こり「この時期にファンド設立はリスクであろう」と断念。それと同時期に以前からお世話になっていた方が「IPOを手伝ってほしい」と声をかけてくださったので、日本に帰ることにしました。

—新井さんは、本当にいろいろなチャレンジをされますね。

“超”がつくほど好奇心旺盛で、何でも首を突っ込んでしまう。とにかく人に会いたくなるし、珍しいモノはこの目で見に行きたくなるのです。興味の分野も広いし、フットワークも軽い。日本国内だったら、興味があるところにはすぐに出向きます。

大学での教鞭と 社外取締役を兼務

—現在は、どのお仕事を中心に活動されていますか?

今は大学で教鞭を執る傍ら、社外取締役として数社に関わらせていただいたり、さらに年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)の委員にも名を連ねております。それに加えて、中小企業支援にも取り組んでいまして、経理だけでなく議事録を書いたり、労基関係、補助金の申請から上場の経験を活かしたお手伝いも行っています。原価計算やシステムのパッケージ導入支援や工場の方に工業簿記を教えたりもしますね。とにかく現場の仕事が大好きなんです。



—最近の学生さんはいかがですか？

学生はかわいいですよ。みんな素直です。私が学生に伝えているのは「考える人になってほしい」ということ。大企業に進むにせよベンチャー企業に勤めるにせよ、自分の生き方を自分で選べる人間になってほしいと願っています。

私が一方的に喋る授業ではなく、学生同士でディスカッションしてもらっているのもそのためです。特別講義で社会人を呼んで話をしてもらうこともあります。みんな積極的に質問をしますね。意欲とか自分の考え方を引き出せるような授業を心掛けています。

—社外取締役は？

現在は、製菓会社、不動産会社、小売業系のクレジットカード会社の社外取締役を務めております。企業価値を高めるために、それぞれの会社に貢献していく方法について、日々模索しています。The International Corporate Governance Network (ICGN) や実践コーポレートガバナンス研究会等に所属して、意見交換しながら研鑽に励んでいます。

そもそも日本の企業の社外取締役は微妙な立ち位置にあると感じていて、なかなか立場や職掌が確立していないのが現状ではないでしょうか。日本はこれまで企業内部で完結してきましたし、そこに社外の人に関わることで自体が新しいコンセプトになりますから。

その一方でアメリカなどでは、CEO以外はずべて社外役員という会社が多いです。比較すると「日本はこれで大丈夫か？」と不安になることもあります。でも、私に声を掛けてくださった企業は、業界そのものが変革を強いられていて、インクルージョンという意味を含めて、「外の声」を欲しがったのだと思います。

これから活躍する 女性たちのために

—これまで様々な分野で活躍してきた新井さんだからこそ実感する公認会計士資格の魅力とはどのようなものでしょうか。

やはり“経営の原点”ではないでしょうか。今までのキャリアを通して、公認会計士として行った監査業務の視点は、仕事をする上で基盤となりました。コーポレートガバナンスにおいても、会計士の知見は不可欠なものです。こういった流れは今後ますます加速するでしょうし、影響力も強くなると思います。

—今後の新井さんのビジョンをお聞かせください。

今、私が社外役員として意欲的に臨んでいるのは、「私が踏み台になろう」という覚悟の表れです。先駆者として、公認会計士資格を持つ女性だけでなく、女性幹部にとっても、少しでも歩きやすい道を切り拓いていきたいと考えています。自分が置かれている状況をどう全うしていくべきかが、これからの私のフォーカスポイントになります。後輩に門戸を広げ続けるためにも、日々、発信していきたいと思っています。

—ありがとうございます。それでは最後に、若い公認会計士の方々へのメッセージをお願いいたします。

公認会計士の資格自体は本当に大きな広がりを持っていると思っています。学生にも、「将来どうしよう？と悩むなら公認会計士資格を取得することを選択肢として入れるべき。公認会計士ならこんなこともできるよ」と伝えていきます。

公認会計士に限った話ではありませんが、自分ですぐに限界を作らないで、若いときこそいろいろなことにチャレンジしてほしいなと思います。自分で“これダメかも”って思ってしまうがちですね。限界を作らず公認会計士としての自分の可能性を広げていただきたいですね。

このインタビューは2018年8月10日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1

TEL:03-3515-1120(代表)

03-3515-1130(国際グループ)

<http://www.hp.jicpa.or.jp/>